東洋史研究
第十二卷第四號　昭和廿八年六月發行

七世紀初頭の中国における内亂に就いて（上）

横田　滋

一　序言

これまで中國史上における隋朝の意義が論ぜられる場合、「隋唐帝國」などと並稱されてきたことからもわかるように、隋唐両王朝を一連のものとし、隋朝を唐朝の先驅的國家、あるいは唐朝を隋朝の再版乃至擴大再編成と考えられてきたように思う。たしかに兩者をきりはなして考察することのまちがいであることはいうまでもないが、しかし制度的に兩者が共通性をもつているからといつて、隋朝を唐朝の單なる序論的位置において、これを唐朝の中に埋沒してしまうことは、やはり隋朝に對して正當な歴史的位置を與えたものとはいえないであろう。もし隋朝をこれまでのように位置づけるならば、七世紀初頭、煬帝の高句麗遠征を契機として、全中國的な規模で、かつ隋朝政權を崩壞せしめるほどのエネルギーを發揮してたゝかわれた諸叛亂の歴史を、どのように把握すればよいのであろうか。その歴史的意義の見失われる恐れはないだろうか。しかし、このような内亂であつたにもかゝわらず、結果的には唐朝を成立せしめたのである。だからといつて、この隋唐變革期の内亂の歴史を、失敗の歴史としたり、「群雄割據」の一語で片附けてしまうことはあやまりであると

思う。總じて叛亂などでは、その時代の政治的な諸現象が最も集約的に現われ、權力をめぐる諸關係が最も露骨に展開するものであるが、隋朝に正當な歴史的位置をあたえ、唐朝を正しく理解するためにも、この隋末唐初の内亂を分析する必要があると思う。既に鈴木俊、小笠原正治兩氏がものされた研究[1]があるが、本稿で私は私なりに、この時代の歴史の推進に大きな役割を果した内亂を描いてみたいと思う。

二　隋朝政權の危機

均田＝租庸調体制を國家支配の基礎として成立した隋朝政權は、開皇七年（五八七）まず梁を、ついで九年（五八九）江南の陳を征服して、四世紀に亙つて分裂した南北朝統一の事業を達成した。そして隋書地理志などが仁壽から大業初にかけての天下郡縣數、戸口及び墾田數をかゝげて、「隋氏の盛んなることこゝに極まる」と評している[2]ように、隋朝政權は飛躍的な發展をとげた。その成立當初、四百萬にみたなかつた戸數が八九〇萬をこえ、開皇十二年（五九二）から十七年（五九七）において、中外の倉庫みたざるなく、廊廡の下に積んだなどと傳えられる[3]事實は、このことを裏書きするものといえよう。しかし同時に、監察御史房彦謙が「主上、忌刻にして苛酷、太子卑弱、諸王權を擅にす。天下安しと雖も方に危亂を憂う」と近親に語り、その子玄齡も「主上もと功德なく、詐りを以て天下をとる。諸子みな驕奢にして仁ならず、必ず自ら相誅夷せん。今承平と雖も、その亡ぶや翹足して待つべし」と述べている[4]事實をも注意しなければならない。それは、隋氏の極盛といわれる時期には既に、多かれ少なかれ衰亡の兆が見え、隋朝政權の危機がこのような人々に意識されてきたことによるものと思う。では一体、隋朝政權の危機とは具体的にどのようなものであつたろうか。

隋朝は開皇九年（五八九）江南を支配下に治めたとはいえ、江南の特殊條件を無視した中央集權的官僚支配[5]のために、結集された反隋朝勢力は、汪文進・高智慧等の江南豪族を中心とする叛亂となつて、翌十年（五九〇）江南廣東地方に爆發した。叛亂は陳の故境全土に波及したが、彼等は中央派遣の刺史縣令を執えてその腸を引出しこま切れにして食い、「こ

れでもまだ俺達に五教を誦せよというか」と深いにくしみの叫びをあげている。叛亂はやがて鎭壓されるが、はげしい抵抗の前に隋朝政府は「其渠帥を署して刺史縣令となさ」ざるを得なかつた。[6] こうした江南の反撃はその後もつゞけられ、開皇十二年（五九二）、劉權が蘇州刺史になつた當時も、「物情尙擾」す狀態にあり、十七年（五九七）には桂州俚帥李光仕の亂、（この時も首領を署して州縣官としている）桂州人李世賢の亂、二十年（六〇〇）には熙州人李英林の反、仁壽二年（六〇二）には交州俚帥李佛子の亂等が數えられる。勿論記錄にない叛亂は、更に多くあつたにちがいない。從つて江南における隋朝の支配は、相當根强い抵抗にあつて阻止されていたように思われる。

このような隋朝權力に對する抵抗は、山東河北を中心とする舊北齊の地域でもはげしかつた。この地域では北齊支配の當時から、顏之推がその家訓の省事篇において、士族の甲兵を弄し、私家の權勢を維持することに對して非常な非難を放つているように、また通典所引の關東風俗傳にも述べられているように、[7] 豪族地主層が土地を集中して鄕村に强大な力をもつていたのに反し、「立錐の地」もなき均田農民層が生產過程から投げ出されており、農民層における階層分化が著しく進んでいた。[8] そうした社會の上にたつた隋朝政府が均田制的支配確立のために、これら農民層を强力に把握しようとしたことはいうまでもない。事實、しばしば「山東の民、流冗多きを以て按檢し」、「山東なお齊の俗を承け、機巧姦僞、避役惰遊の者十の六七、四方の疲人あるいは老と詐り小と詐りて租賦を規免した」[9] のに對して、例えば貌閱、糾告、地方官の免職流刑、あるいは戶籍＝租稅台帳整備のための輸籍法等、要するに均田体制の强化という方向で國家權力の貫徹をはかつている。[10] しかもその基軸である徭役勞働に對する規避がより激しく高まつてゆく現實に抗しきれず、文帝は開皇十二年（五九二）に「河北山東、今年の田租は三分一を減じ、兵は半ばを減じて、功調は全免」し、十七年（五九七）には、「正賦を停めて黎元に賜う」という租稅徭役の大巾免除を行わざるを得なかつた。[11] このことは明らかにこの地方の隋朝權力に對する抵抗が、他地方に比してはるかに激しかつたことを意味するであろう。しかもこれら二つの地域――江南と舊北齊地域――は生產力發展における先進地域であり、隋朝にとつては、絕對に掌握しなければならぬ重要な基本的經濟地帶で

あつた。にもかかわらず既にみたところからもわかるように、そこにまきおこつた抵抗を隋朝政府はしかく容易に抑えることが出來なかつたのである。その上このような抵抗が、深く周邊諸民族との對立關係＝外壓と結びついていたように思われる點は注意しなければならない。そのきわめて緊迫した情勢は、突厥及び高句麗との間に集中的にあらわれている。この點については後章で詳しく述べるが、要するに隋の對突厥政策は公主の降嫁というような妥協的なかたちで、その壓力を防ぎとめていたにすぎず、兩者の力關係はいつ破れるかわからない不安定な狀態にあつた。だから政府としては國內の抵抗を抑えると共に、周邊部からの外壓にも對決してゆかねばならないという、苦しい立場に追い込まれていたわけである。こう考えてくると隋朝の中國統一は、これまでいわれている程には成功していなかつたように思われる。

このような情勢の中で煬帝が卽位し、文帝の時代からたえず繼續されてきた土木工事が、より擴大强化して行われた。勞働力の農業生產よりの引拔きと、運河による物資の集中の結果は、「天下は役に死し、家は財を傷つけ」飢餓狀態に追いつめられた農民を廣汎に生みだした。大業五年（六〇九）十一月、民部侍郎裴蘊は次のように上奏している。「時になお高祖和平の後を承けて、禁網疎闊、戶口多く漏る。或いは年成丁に及ぶもなお詐りて小となし、未だ老に至らざるにすでに租賦を免る。蘊、刺史を歷任し、もとより其〔事〕情を知る。是により條奏す、皆貌閱せしめ、もし一人不實ならば官司は解職し、鄕正里長は流配す。又民に相告を許し、もし一丁を糾得せば被糾の家をして賦役を代輸せしめよ」と。[12] これと同樣の記事はすでに開皇三年（五八三）にも見出すことができる。それはとりもなおさず、年令のごまかし、脫漏、逃亡等による農民の徭役規避のたゝかいが、さまざまな曲線を描きつゝも、隋初以來不斷に展開されていたことを物語るであろう。とともに、國家自らがその社會的基礎である均田農民層を掌握するのにいかに苦しんだかを示すものでもあろう。煬帝卽位して五年目、いわゆる隋氏の極盛といわれる時期に、かゝる支配强化の上奏がなされるということは、あくなき徭役勞働の强化に對する人民の抵抗の高まりと、支配權力の動搖を示すものというべきである。汾陽宮を造營せんとした煬帝に對し、御史大夫張衡が勞役徵發に抑損を加えんことを諫言しているのも、[13] 明らかにかゝる現實を反映するもの

である。

こゝにおいて、いわゆる「隋氏の極盛」は、激發してくる農民の抵抗を國家の最大限の力でもつて抑壓する事によつてもたらされたものであつたといつてもよいであろう。それと共に皇帝を中心とする權力機構内部にあつても、既に房彦謙父子が憂慮しているように、派閥の爭(それは下からの抵抗が高まれば高まる程深刻になつてくる)に政治の腐敗を示していた。かくして隋朝の極盛期とは、まさに多くの矛盾を含んだ隋朝政權の危機をも意味していたといつてもよいであろう。

三　高句麗遠征と農民の抵抗

開皇十八年(五九八)三十萬の軍勢のうち十中八九の死者を出して慘敗した文帝の遠征にこりず、煬帝をして再び遠征の決意を固めさせ、「近古出師の盛なること未だこれ有らざるなり」と評せられた遠征軍が、しかも一敗地にまみれたにもかゝわらず、なぜ三度まで執拗に强行せざるを得なかつたのであろうか。この理由についてこゝではつきりした解決はできないが、次のようなことが考え得るのではなかろうか。

開皇十年(五九〇)――といえば江南平定の翌年である――文帝は高句麗王湯に書を送つて、その中で、(1)高句麗は毎歲朝貢して藩附を稱しているとはいうものゝ、なお誠節を盡さず、かつ既に隋に服している靺鞨や契丹を壓迫して、對隋關係をきりはなそうとしている。(2)更に隋の邊境にも進出して邊人を殺害し、「姦謀」を聘し、隋側の消息をさぐり軍備を整えて「異圖」を懷いている。(3)陳を征服したのは、彼が人民を殺害し、我が烽候を不意討し、邊境を抄掠したからであると述べている。[14] この書信の内容と、突厥はじめ新羅、百濟、西域諸國等殆ど隋に朝貢しているのに、高句麗が煬帝の時になつて朝貢をとゞめてしまつたこと、文帝が遼東遠征を重臣にはかつた時、高熲は固くいさめて反對しており、[15] 劉炫も亦反對し「撫夷論」を著して諷刺していること、[16] 更に煬帝の遠征の詔をみると、「勃碣の間に崇聚し、荐りに遼濊の境を食し……懷姦を掩慝して唯日も足らず……朝覲の禮も行わず……亡叛を誘納し紀極を知らず、邊垂を充斥して烽候

を勞す、關柝之を以て靜かならず、生人之が爲に業を廢す……契丹の黨を兼して海戍を虔劉し、靺鞨の服を習いて遼西を侵極す」と。[17] 以上のようなことを考え併せると、當時の高句麗は相當に强力な國家に成長しており、かえつて中國側を壓するような傾向にあつたのではないかと思われる。煬帝がこれ等の事實を遠征の詔書中に列擧して遠征の正當性を主張し、中華皇帝としての怒りを文面に發していることこそ、かえつてこのことを裏書きするものであろう。遼東遠征の歷史をふりかえる時、たしかに「文帝の遠征から約七十年間、何度も隋・唐帝國の大軍を迎えうつた高句麗の果敢不屈な抗戰は、かつて漢代以來の中國諸王朝が朝鮮を征服して植民地支配を確立したのに較べると、驚くほどの力强い抗戰であり、そこに朝鮮諸種族のたくましい成長が示されている。[18]」「これらの戰爭における高句麗王朝の防禦力の强固さは、發展期にあつた高句麗の社會的な强靱性を示すものであり、その奴隷制の上に立つた國家組織の强固さを示すもの」であろう。[19] 從つて東北からうける外壓に、隋朝政權としても、必ずしも安泰たり得なかつたものと思われるのである。

その上、突厥との間に同盟が結ばれるということは、看過出來ない重大な問題であつたにちがいない。大業三年（六〇七）四月、突厥啓民可汗の帳に幸した煬帝は、そこで高句麗の使者を見た。ところが可汗は何等この使者をかくそうとせず、共に煬帝に會見したという。この時、隨從せる黃門侍郎裴矩は、「高麗の地は、周代には箕子を封じ、漢代には三郡に分治し、晉代でも遼東を支配した。しかし現在はこゝを支配出來ず外域となつている。先帝の遠征は功なく、陛下の時こそどうしても服屬させねばならぬ。今やその使者が突厥に朝し、國をあげて化に從おうとしているが、まことに憂慮すべきだ」と上奏している。[20] 彼の考えの底には、所謂儒敎的中華的世界觀が强く流れ、高句麗が隋朝の支配下におかれていないことの不合理性を前提とし、突厥と提携し國をあげて化に從おうとしている今、それによつて生ずる隋朝權力への脅威を感じとつて奏上するに至つたものと思われる。一方、可汗が敢てその使者をかくさなかつた眞意は知る由もないが、彼としては、何等隋朝を恐れる必要がない程に、自らの充實せる國力と高句麗との同盟に期待するものがあつたのではなかろうか。この年から八年後の大業十一年（六一五）啓民の後をついだ始畢可汗は、北塞に巡幸した煬帝を雁門にかこみ、

突厥の矢が帝前までとんでくるほどに隋軍を徹底的に壓迫し、雁門四十一城のうち三十九城を陷れたという。[21] これを機として突厥の朝貢が絶えたのであるが、また「隋末亂離、中國人の之に歸するもの無數にして、遂に大いに强盛となり、勢い中夏を陵ぎ……」「東は契丹室韋より西は吐谷渾高昌に盡く、諸國みな之に臣となる」といわれていることからも、[22] 當時の突厥の强盛の程がうかがわれる。その多少の時間的なずれを考慮しても、その軍事力を背景にした啓民可汗の行動もうなづかれるのではないか。ともかく煬帝は裴矩の言をいれ、高句麗王元の朝貢を促したが、その命を奉じなかつた——こゝでも彼の自信のほどがわかる——ので始めて征遼の策をたてたといわれる。

以上のようにみてくるならば、高句麗と突厥の同盟によつて隋朝がいかほど脅威＝外壓を感じたかゞ知られよう。しかも遼東に接する舊北齊地域は、前述のごとき亡叛誘納という形において高句麗に結合し、そこに侵透してくる高句麗の勢力によつて、その地域への隋朝權力の貫徹は、かなり阻まれていたことゝ思われる。從つてこそ、名實共に中國の統一王朝として中央集權を實現する爲には、またしようとすればする程、隋朝としてはどうしてもこれらの外壓を排除しなければならなかつたのである。一方國內的には均田農民層の抵抗がますます激化して、隋朝政權存立の物質的基盤たる均田制經濟がいよいよその行詰りを露呈してくるといつた情勢にあつた。その場合、外壓を軍事的に擊破してゆこうとすれば、農民支配はます〳〵無慈悲なものとならざるを得ない。そこで流亡と沒落の危機にある均田農民層を外征にふりむけることによつて、彼等の國家權力に對する抵抗を倒錯させ、又從軍によつて位階勳等官職をさえ授けられるという幻想を彼等にいだかせて戰線にかり出すことによつて、危機にたたされた隋朝政權を崩壞から守ろうとした。だからこそ、外壓と抵抗が强まり、危機と矛盾が深まれば深まる程、その克服の爲に遠征を、執拗に三度までもやらざるを得なかつたのではないかと思う。

そこでまづ北方突厥の脅威を除くために、滿州朝鮮を制壓し自己の側面をかためるべく、遠征軍を遼東に派遣したのである。大運河の開鑿もまたこれに密接に關連することはいうまでもない。首都大興を底點とする「Y字型」運河を形成す

ることによつて、經濟的には帝國の二つの基本的經濟地帶を、コントロールすることを可能にすると共に、[23] 軍事的には、その一本を河北に貫通させることによつて、北方及び東北方からの外壓防衛を意圖したものであつたと思われる。

大業七年（六一一）二月、遠征の詔出るや、天下の兵は遠近を問わず涿郡（北京附近）に集結を命ぜられ、江淮以南の水手一萬人、弩手三萬人、嶺南の排鑿手三萬人が徵用された。五月、河南・淮南・江南に勅して戎車五萬乘を作らせ高陽に輸送。河南河北の人民に軍需品を供出。七月、江淮以南の人民と船を徵用し、黎陽及び洛口倉の貯藏米を涿郡に運搬させた。この間の光景を敍して「舳艫相次ぐこと千餘里、兵甲攻取の具を載す、往還在道の者常に數十萬人、道に塡咽し晝夜絶えず、死者相枕して臭穢路に盈つ、天下騷動す」と。[24] 造船に徵用されては「官吏督役し晝夜水中に立つ、腰より下は皆蛆を生ず、死者什三四」と。[25] 富豪に對しても、兵馬の損耗補塡のため、貲產を量つて錢を出させ、軍用馬を買わしめた。彼等にして「凍餒する者十家にして九」といわれる。[26] もし納入品に濫惡のものがあれば、納入者を斬首したという。[27] これらは一切を人民の徭役勞働力に依存した時代の臨戰体制を浮彫したもので、「天下騷動」の四字には、農民社會のいゝようのない不安と動搖がきざみこまれている。このような外征が何をもたらしたか、「民夫を發して米を運び、瀘河懷遠二鎭に積す。車牛の往きし者は皆返らず、士卒の死亡半ばを過ぐ、耕稼時を失し、田疇多く荒る。これに加うるに饑饉、穀價踊貴し、東北邊尤も甚し、斗米の直數百錢なり、所運の米、粗惡なれば民をして糴して之を償わしむ、鹿車の夫六十餘萬を發し、二人して米三石を推さしむ。道途險遠なれば自らの餱糧に充當す。鎭に至るも輸すべきものなし、皆罪を懼れて亡命す。重ぬるに、官吏は貪殘にして因緣侵漁すれば、百姓困窮し財力俱に竭く」という通鑑の敍述こそ、[28] それを物語つてあまりあり、人々は樹皮を剝きて食い、やがて葉に及び、土を煮、藁を粉末にし、果ては人相食むの狀態に立至つている。[29] そして「安居すれば凍餒に勝えず、死期交々急なり、剽掠すればなお生を延ばすを得、是に於て始めて相聚りて群盜となり」、[30] また「彊者は聚りて盜となり、弱者は自ら賣りて奴婢となる」[31] というように、戰爭とそれがもたらす水害、飢饉と疾疫が

相重なつて、農民層の分解と沒落を促進した。彼等が生存のために群盜化してゆく經緯がはつきりよみとられるであろう。しかもこゝで我々は、生存が危機にさらされている中にあつて、それぞれの場における抵抗が個別的にしろ行われていたことを見逃すわけにはゆかない。こうした場合、上からの外征協力の指令は、官僚組織を通じて末端にまで貫かれるわけであるが、在地における抵抗が、組織化されず個別的なものである限り、抵抗は直ちに强大な國家權力を背景にした出先機關によつて彈壓され、かえつて官吏の横暴と支配の强化を結果している。

かくて遠征を契機として、農民の叛亂という形での抵抗が、きわめて熾烈に展開するのが河北山東を中心とする舊北齊の地域である。從來とても支配の難しかつたこの地域が、遠征による極度に苛酷な收奪と徭役の强化に對してはげしく抵抗したのも當然であろう。

大業七年も暮れようとする十二月、山東の一角鄒平に起つた在地の王薄は、衆を擁して長白山にたてこもり、自ら知世郎と稱し、「遼東に向いてみだりに死ぬことなかれ」の歌を作り人々にアッピールしたところ、征役を避くるものは多く之に感動し、續々彼の下に集つたという。[32] また同じ地方の豆子鯁――こゝは地形深阻で北齊の時代から群盜が多くかくれていたところである――に住む累世仕宦、貲產富厚の劉霸道は、遊俠を好み、常に食客數百人をかゝえていたという。山東に群盜（叛亂）が起るや、遠近のものは多く彼をたよつてその衆十餘萬に達し、阿舅賊と號したと傳えられる。[33] これは二例にすぎないが、當時においては指導者らしい指導者も有しない、從つて史料に足跡をとゞめないような小集團の暴動は無數に存したであろう。かゝる集團は政府軍に鎭壓されたり、他の集團に敗北したりして、離合集散をくりかえしてゆくうちに、相當組織化された大集團に形成されていつたものと思われる。從つて集團の正確な數的規模は知る由もないが、「多き者は十餘萬、少き者も數萬人」といわれていることから、大体を察することが出來よう。之ら集團は、史書で「賊帥」「盜」「賊」などとよばれているが、その根幹をなすものが、均田制關係から逃れた農民乃至沒落農民であつたことは明らかである。その行動の目標は、先の王薄の場合よく表われているように、均田農民の直接的支配たる徭役勞働制への

抵抗であり、反外征闘争であつたと思われる。とくに第一次遠征が敗北に終り、再び第二次遠征の徴兵がなされるや、抵抗はいよ〳〵あらわな形をとつてくる。「去年吾輩の父兄、帝に從いて征す。全盛の時に當りてなお死亡太半なり、骸骨歸らず、今天下罷敝す。吾屬遺類なからん」と叫び亡散する者多く、[34] また手足を折つて福手福足と稱し、征役を避ける者も出ている。[35] このような中で強制的な徴兵が遂行されたため、「士卒の逃亡する者相繼ぎ、極刑を以てしてもなお阻止しえなかつた」という。[36] そのほか、徴兵するも徴集地に期日までに集合せず逃亡し、[37] やむなく從軍したものも群盜の中に集團的に逃げこんだり、或いは人馬に支給された百日分の食糧や排甲槍矟、衣類、戎具火幕等三石以上の重量であつたので、これらを遺棄する者もあつた。かゝる兵士は嚴罰に處したが、なお途中で捨て、穴を掘つて埋めたため、前線到着まで殆ど盡きてしまつたという。[38] 更に出陣した煬帝暗殺の計畫さえもなされているのであつてみれば、かゝる兵士の行動は、單に「重さ」のみに原因するのでなく、その基底には反遠征の意志が強く働いていたとみるべきであろう。官有牧場の厩馬が原因不明で多く死亡したり、また河南扶風地方の馬に長さ數寸もある角が生えたなどの異變が隋書五行志に多く見えるが、その事實の如何はともあれ、煬帝の強引な、五行志の言葉をかれば「天氣に逆つた」遠征が結果する社會的不安を象徴するものであろう。[39]

まさに遼東遠征こそは、均田農民層の反徭役闘争、奴隷制的な均田支配体制＝權力に對する闘争を、叛亂にまで飛躍させる踏台になつたものといえる。もとより叛亂という形に彼等の力を結集するまでには、さま〴〵な形の抵抗が展開されていたことはいうまでもなく、またそれを輕く評價してはならないが、それが累積し、遂に内亂にまで高まつたのは、遠征を契機として增大する收奪に對し、もはやいかなる逃れ路もないというところまで追いつめられるに至つた彼等が、自分達を苦しめているものを把握し、自己の生命を保證する道が、權力に對する反擊以外にないということを意識した結果であろう。おとなしくして容易に動かない農民が「百姓思亂」といわれるように叛亂を思うというのは餘程のことである。

かくて山東河北を中心にして起つた諸叛亂が、この兩省はもとより浙江、江蘇、河南、安徽、湖南、廣東等ひろく江南

といわれる地方及び山西、陝西、甘肅の諸省まで擴がり、「天下の人、十分の九をあげて盜賊となる」といわれるような[40]全中國的な總抵抗＝內亂に發展していつた。しかもこのような發展に大きな役割を果したのが、禮部尙書楊玄感の叛亂である。

四　楊玄感の叛亂

楊玄感は文帝の時代に厚い信任をうけた楊素の子であり、隋朝官僚の中でも極めて優位にあつた。この時、彼は遼東遠征の兵站基地黎陽倉の司令官に任ぜられていた。その彼が叛亂をおこしたというのは問題である。

彼の父楊素は、文帝の中國統一事業に積極的に協力した官僚の一人であるが、權力機構內にあつての彼の政治的經濟的な力は極めて大きかつた。彼は廣く資產を營み、京師や地方に有する邸店碾磑田宅は數えられぬ程で、家僮千數、後庭の妓妾千數百人、第宅の華麗は宮禁に擬せられたといわれ、[41]また當時、隋朝の樞要な地位は、彼の一族諸子や推薦した人物、部下などが占めていた。[42]その權勢は一太子一王をも廢し得る程で、朝臣にして彼の意にさからう者は誅せられ、迎合する者は才用なくとも進擢せられたので、朝廷で彼に畏附しないものはなかつたという。もとより彼に挑戰したものもないではなかつたが（柳彧、李綱、梁毗等）、いかなる者も、彼の權勢の前には罰せられたり、獄につながれたり、沒落したりせねばならなかつた。こうしたことは楊素に限らず、その外の貴族官僚にも楊素的權勢をみることができる。「開皇の四貴」とか「選曹の七貴」（煬帝時代）などがそれであり、實質的に當時の支配權力をにぎつていた。しかも彼等は隋朝內部にあつて夫々派閥朋黨を構成し、楊素の場合、その一族は勿論、玄感が「在朝の文武、多くは是れ父の將吏」というように、その門生故吏、親憑する者を、私的恩顧關係を通じて官僚機構の中に浸透させ、勢力の結合と擴大をはかつたのである。それも中央のみならず、裴蘊、虞世基等は司隷刺史以下の官屬の廢止をやり、代りに御史百余人を增置し、以て自己の腹心になるような姦黠を朋黨として配し、地方政治機構までその手に掌握するに至つている。[43]從つて隋朝が律令体制を整備

し、いわゆる律令制國家として出發しながらも、なお隋朝權力というものは、多分に楊素に代表されるような貴族の連合政權ともいうべき形をとつていた。つまり、こうした人物を包容して樹立された文帝の政治權力は、まだそれ程にデスポティックではなかつたと思われる。文帝は「吾貴くして天子となり、しかも自由を得ず」との嘆息をもらしているが、[44]それは必ずしも皇后の極端な嫉妬心とばかりいえないように思う。

しかし文帝は、一應、特權的官僚の制約をうけながらも、一方では、貴族からその權勢を奪つてデスポットたらんとしていたようである。四貴の一人觀德王雄を司空に轉じさせて、外は優崇を示し、內實はその權を奪わんとし、楊素をも梁毗の上言を機に疎忌するようになつた。[45]また皇太子勇の宿營に勇武なる者を多數配置せんことを奏した高熲に對し、その必要を認めず、勇と高熲とのつながりと勢力結集を極度に警戒している。[46]更に勇に百官が朝したことに對して文帝は、太子が有司を一時に徵召し、法服設樂して受賀するは禮制にそむくものだと斷じている。[47]このような事例は、文帝が貴族權力を抑えつゝ、デスポットたらんとしたことを物語るものではないか。

ところで文帝から漸く疎外されつゝあつた楊素は、晉王廣＝煬帝の皇太子就位の問題、蜀王秀の問題、文帝の死にからまる晉王廣と彼の陰謀等を通じて、晉王廣＝煬帝につながりをもとめ、自己の勢威を隋朝內で維持していこうとした。しかし煬帝は外見はこれを優遇しつゝも、彼の功を恃みて驕倨無禮なるをにくんでいたようで、彼の死んだ時、近臣に「素をして死なざらしめば終に族滅すべし」と洩らしていることからしても、[48]彼が排除せられつゝあつたことがわかる。これに對し、煬帝の權力には、いわゆる「選曹の七貴」といわれる官僚グループがつながつていつた。その中には、文帝時代、楊素に對立した高熲の系統をひく蘇威が入つており、これが陰に對立勢力として存在していた。

楊玄感の叛亂は、いわばこのようなデスポティズム形成途上における官僚內部の對立を背景として起されたのである。彼は父の死んだ時に洩らした煬帝の言葉を知つていたし、また父の息のかゝつた在朝の故吏や自分に壓力のかかつてくることを見透し、內心不安でならなかつた。彼が諸弟とはかり、反煬帝の叛亂を企てた個人的契機はこのようなところにあ

つた。彼が亂をおこすや、開皇の制にならつた政權をつくつていることからみても、煬帝の政權を否定していることは明らかである。これまで一部の官僚と結んで自己の勢力を形成し、煬帝廢止の計畫を進めていた彼に、反煬帝的官僚特に故楊素のグループであつたものが應じたのも當然であり、又楊素と親密な關係にあつた薛道衡のように文帝をたゝえ、亂後、玄感の殘黨追求の上意を拒否して譴せられるようなものもでてきたわけである。[49]

しかしその原因が官僚內部の對立＝黨爭にからまるものであつたにもせよ、しかもそれが單なる黨爭に終らずして、遠征に抵抗する山東の民衆のエネルギーにあふられて、遂に反煬帝の線に統一された武力鬪爭に展開していつたことは注目しなければならない。

當時黎陽において督運の任についていた彼は「我身上柱國となり、家には鉅萬の金を累ぬ。富貴に至りては求むる所なし。今は破家滅族を顧みず、たゞ天下の爲に倒懸の急を解き、黎元の命を救わんのみ」と衆に誓い、同時に樊子蓋に書を送り、煬帝の政權を否定し、暴政によつて苦しむ人民の要求に應じた叛亂であると述べている。だからこそ民衆は踊躍して萬歲を稱し、亂に從う者市の如く十余萬という勢になつたのである（この亂については隋書楊玄感傳に詳しい）。

この亂は數ケ月で鎭壓されてしまうが、それが煬帝にどれほど大きな動搖を與えたかは、彼が裴蘊に「玄感一呼して從う者十萬。益々知る。天下の人の多きを欲せず、多ければ相聚りて盜となるのみ……」といつたこと、遼東から急據、全軍を引返したことからもうかがえよう。また支配權力內部から煬帝の政治に對する批判が貴族の叛亂という形で行動的に出たということは、權力に深刻な影響を與えずにはおかない。例えば、この亂に對する支配官僚の對應の仕方にも相違がでている。さきの裴蘊は「盡く誅を加えなかつたならば後が危い」という煬帝の意を体して、峻法を以てのぞみ、三萬余人を殺し、其家を籍沒した。大半は枉死だという。六千余人を流徒し、玄感から米を受けた者を穴埋めにするというやり方に對し[50]、薛道衡のように拒否した者もあり、蘇威は、勞役やまず百姓亂を思う、そうした現實の中でおこされたこの亂が、他の亂を誘發する可能性をキャッチし、そのことの方をおそれている。[51]

かくして玄感の亂は、彼自身の目的は達せられなかつたけれども、(1)第二次遠征を挫折せしめ、(2)權力に動搖と分裂を與え、(3)叛亂を全國的に擴大するという結果をもたらした。

（未完）

註

① 鈴木俊　隋末の亂と唐朝の成立　史淵第五三輯
小笠原正治　隋朝末期の動亂における官僚群　史潮第四三號

② 隋書卷二九地理志上、

③ 隋書卷二四食貨志　通鑑卷一七八

④ 通鑑卷一七九、開皇二十年十二月の條　舊唐書卷六六房玄齡傳

⑤ 通鑑卷一七七、開皇十年十一月の條

⑥ ⑤參照　北史卷六三蘇威傳、隋書の本紀、楊素、裴矩劉弘の傳

⑦ 通典、卷二、食貨二　田制下、食貨三鄉黨

⑧ 北齊支配下の情勢については魏晋南北朝通史參照

⑨ ㊻㊼ 隋書卷四五文四子傳、同食貨志

⑩ ⑪ 隋書卷二四食貨志　通鑑卷一七六　至德三年五月の條

⑫ ㊸ 隋書卷六七　裴蘊傳

⑬ 通鑑卷一八一　大業六年三月の條

⑭ 隋書卷八一　高麗傳等によれば開皇十七年となつているが、三國史記卷一九高句麗本紀では十七年は十年の誤なるを指摘している。

⑮ 隋書卷四一　高熲傳

⑯ 隋書卷七五　劉炫傳　通鑑卷一八二　大業十年十月の條

⑰ 三國史記卷二〇　高句麗本紀八嬰陽王二十三年正月の條

⑱ 旗田巍著　朝鮮史　四三—四頁參照

⑲ 林光澈著　朝鮮歷史讀本　八〇頁參照

⑳ 隋書卷六七　裴矩傳

㉑ 通鑑卷一八二　大業十一年八月の條

㉒ 隋書卷八四、突厥傳、通鑑卷一八五、武德元年五月の條

㉓ 世界の歷史、東洋　一〇四頁參照

㉔ ㉕ 通鑑卷一八一、大業七年、二、四、五、七月の條

㉖ ㉗ ㉙ ㉛ 隋書卷二四食貨志及び卷四本紀

㉘ ㉚ ㉜ ㉝ 通鑑卷一八一　大業七年十二月の條

㉞ 隋書卷七〇　劉元進傳

㉟ 唐會要卷三九　議刑輕重、貞觀十六年七月の條註

㊱ ㊲ 通鑑一八二　大業十年三月七月の條

㊳ 通鑑卷一八一　大業八年六月の條

㊴ 隋書卷二三五行志　通鑑卷一八二　大業九年十二月の條

㊵ 通典卷七　歷代盛衰戶口

㊶ ㊷ 通鑑卷一七九　仁壽二年十二月の條

㊹ 隋書卷三六　后妃傳

㊺ 隋書卷四三、觀德王雄傳、卷四八　楊素傳

㊽ 通鑑卷一八二　大業九年四月の條

㊾ 隋書卷五七　薛道衡傳

㊿ 通鑑卷一八二　大業九年八月の條

(51) 隋書卷四一　蘇威傳

Civil War at the Beginning of the 7th Century in China

Shigeru Yokota

The Sui (隋) dynasty failed in securing internal peace due to the resistance of the people on the one hand and the pressure from outside by the Kao-kou-li (高句麗) and the T'u-chüeh (突厥), and this brought the dynasty to a critical situation in spite of its endeavours to upkeep political power by means of reinforcing the system of equitable redistribution of land. The military expeditions to Kao-kou-li, which had been made to get rid of this turbalent people, resulted in accelerating internal disruption and led to the revolts of the peasant class which had been seriously affected by the land redistribution policy. Li Yüan (李淵) and his clique supported by the anti-Sui officials and powerful clans took action to suppress the peasant uprisings, and finally succeeded in founding the T'ang (唐) dynasty. The latter replaced the aristocracy as the mechanism of administration with the bureaucracy which was born as the result of the development of jurisprudence.